

Brian Lumley

幻夢の英雄

Hero of Dreams

ブライアン・ラムレイ
森瀬 線 訳



青心社

幻夢の英雄

ブライアン・ラムレイ
訳 森瀬 繚

青心社

HERO OF DREAMS by BRIAN LUMLEY

Copyright © 1986 by Brian Lumley

Japanese translation published by arrangement with

The English Agency(Japan) Ltd.

第1部

第2部

第3部

第4部

第5部

エピソード

訳者あとがき

316 311 259 169 121 47 11

本電子書籍は立ち読み版ですのでこの目次の項目には沿っていませんが、項目を見ていただくためにあえて書籍版のまま掲載しています。



ドリームランド

●地球の幻夢境の地図（原案・森瀬繚／作図・中山将平）

この地図は、本作及びH・P・ラウクラフトの諸作品における記述から、推測的に作成したものです。地球上の図法を使用したものではなく、方位や縮尺は必ずしも一様ではありません。



登場人物

デイヴィッド・ヒーロー……地球出身の夢見人^{ドリーマー}。未だ夢の名前^{ドリーム・ネーム}を持たぬ剣士・歌い手・詩人。

《放浪者》エルデイン……夢見人^{ドリーマー}。ヒーローの相棒となる壮年の冒険者。

エブライム・ボラク……オッサラ出身の資産家。実は夢見人^{ドリーマー}で、地球では武器商人だった。

スイニスター・ウッド……冥き神イブ^{くら}ツトウルを奉ずる邪神官。

アミンザ・アンズ……イレク^クヴァドの貴族の娘。スイニスターに囚われている。

ナイラス……テイリスの町外れに住まう大魔法使い。スイニスターの従兄弟。

大樹……かつて遠方の星で栄えた大樹の種族の生き残り。テレパシーで会話する。

幽鬼^{エイトロン}ラテイ……悪魔に呪われた都邑^{まち}、タラリオンの支配者。

タイタス・クロウ、アンリ^クローラン・ド・マリニー……名前のみ登場。「タイタス・クロ

ウ・サーガ」シリーズ（東京創元社、全6冊）の主人公コンビ。

第1部

第1章 最初の出会い

夕暮れ時にさしかかり、幻夢ゆめの高地は肌寒くなりつつあった。

尖った釘のように伸びた草むらが微風を受けて揺れ動く様子はまるで、しゅうしゅうと呼気こきの音を立てる蛇のようで、そそり立つ岩の上に陰影を投げかけていた。

間もなく太陽が沈み、地球の幻夢境ドリームランドの天空に星々の焰ともが灯されることだろう。

デイヴィッド・ヒーローは、このあたりの土地に明るくなかった。これまでのところ、幻夢が彼をここに運んできたことがなかったからである。

ともあれ、好みの場所ではないということだけはわかった。

緑豊かな平原が終わり、そこから先に見えるものといえば、背の低い雑木林や岩がちな斜面、つるつるした泥板岩の数々だった。そして夜が近づいてくると、ごつごつした岩山はほどなく不気味な影を投げかけて、脅かすような黒ぐろとした洞窟に成り果てるのだ。

体をわずかに震わせると、尻にぶら下げている湾曲した剣の柄を撫で、褐色の外套のフードを少しばかり——あくまでも控えめにまくりあげた。彼の鋭敏な耳は、危険の存在を視覚よりも早く教えてくれることが多いのだが、そんなことにならないで欲しいものだ。

斜面に身を乗り出すと、微風は強さを増して風となり、この世のものとも思えぬうめき声をあげた。頭上を見れば、にわかには灰色の雲が現れ、山々の頂を越えて南へと移動していくのだった。南……。かなうことなら、南方に赴く夢を見たかった。

たとえば、クラネス王の統べる地、セレファイスに。

さもなくば、西風が空へと流れ込むところ、空を漂うセラニアンに。

だが、しかし。いかなる場所であれ、彼がいるのはここなのだから、どんな夢だろうと受け入れねばなるまい。いかなる幻夢であろうと……たとえそれが、悪夢であろうともだ。

デイヴィッド・ヒーローは、自分が地球の幻夢境の北方にいるのだと悟ったが、それ以上のことは何もわからなかった。頭上に聳えるこの峰々は、幻夢境において最も墮落した住民どもの根城であるという、音に聞こえしレン高原へと通じる最果ての領域だろうか。あるいは、遙かに巨大で急峻な、冷たき荒野に聳えるカダスの裾野に過ぎないのだろうか。

このような考えが頭の中でぐるぐると回り、夢見人は今しも来た道を引き返し、より健康的な土地に向かおうと心を決めかけた。囁くような鋼鉄の音を立てて剣を抜き、無意識に体を低くして、防御しやすい姿勢をとるような事態に出くわしたのは、まさにその時のことだった。

下方を見ると、一人きりの放浪者が、岩の裂け目に身を隠そうとしていた。その彼を、六本足のイヌグモどもが三匹取り巻いていて、しゅうしゅうと音を立てながら革靴を履いた彼の足に噛みつき、そのまま引きずりおろそうとしていたのである。

一匹は、物を掴むことのできる前肢で、まっすぐな剣をぎこちなく握りしめていた。それは、連中の忌まわしい責め苦を受けて必死にもがき、しわがれた喘ぎ声あえを漏らしている獲物から奪い取ったものに違いなかった。

デイヴィッド・ヒーローは、幻夢境のもつと文明化された地域の旅行者や語り部たちから、イヌグモのやり口についていくらか聞き知っていた。連中は、厭いとわしいしゅうしゅう声を聞かせたり、飛びついたりして人間を弱らせ、然しかる後に毒のある棘で痺れさせると、生きたまま食べってしまうのだ。そして、その食事は多くの場合、幾晩にもわたって続くというのである。

この三匹の異形の怪物の意図も、そうしたものであることは明白だった。

犠牲者が、その怪物どもに抗あらかうべく、体を押し込むことのできる隙間を探しながら、それはもう気が狂ったかのように暴れまわっているのも、ヒーローには無理からぬことに思えた。

我が身の安全のことなど顧みず、新たな闘入者ヒローは歯を食いしばり、暗闇の中を滑ったり飛んだりして、泥板岩に覆われた斜面を降りていった。そして頭上に剣を振りかぶると口笛を吹き、狂人のように叫び声をあげながら、しゅうしゅうと音を立てて飛び跳ねる生物に突進した。

走りながら空いた手で大きな溶岩の塊を掴み、虫もどきの犬どもに投げつけてやると、命中の衝撃で連中の一匹が空高く飛び上がるのが見えた。実にいい気分だった。

それから怪物どもの上手うまにやっていると、歯を食いしばり、唇を歪めて喘ぎ声あえを漏らしながらも、彼は連中を剣で切り裂いた。

何とも幸運なことに、彼の振るった剣は一匹のイヌグモのいくつも関節のある後ろ脚を切り飛ばしたのだが、それは目下取り囲まれている旅人の剣を振りかざしていた脚だったのだ。

次の瞬間、男は前に飛び出すと、脚を喪^{うしな}つたイヌグモから武器を奪い返した。それから力を合わせて打ちかかり、尾部の針を使わせる隙も与えず、半狂乱の怪物を屠^{ほぶ}つたのである。

しかし今、他のイヌグモどもは戦いのバランスが崩れ、手早く終わらせねばならないことを理解していた。命令の音声が発せられるや、彼らはヒーローめがけて突進し、空中で体をねじると、針を顔面に打ち込んできた。ヒーローは身をかかめて攻撃をかわしざま一匹に剣を突き通したのだが、別の一匹が背中の中のしかかっていたのを感じ、腐食性の毒液の一滴が衣服を徹して肌にも届き、炎で燃やされた時のような激しい痛みを覚えた……かと思うと次の瞬間、彼に取り付いた恐るべき敵が蹴り飛ばされ、息の根が止まる末期^{まうご}の聲が聞こえた。救い出された男が、両手に構えた剣でそいつのゴキブリじみた頭部を胴体から切り飛ばしたのである。

ヒーローは背後を振り返ることもなく、頁岩や溶岩の破片がちらばる地面でピクピクと痙攣している、鱗状の皮で覆われたイヌグモから自分の武器を素早く引き抜くと、そいつのキチン質の頭蓋を縦に切り割った。戦いは終わり、峰々に残されたのはただ呻き声を思わせる風——それから男たちの喘^{わえ}ぎ声、そして悪夢めいたこの地の住人どもの体を流れていた生き血であるところの、色の薄い灰色の体液の名状しがたい滴ばかりだった。

ヒーローは改めてもう一人の男の方に向き直り、何をしているものか覗き込んでみると、彼

は黒い上着で武器を拭つているところだった。振り返った男の目には、感謝の気持ちを示す輝きが宿っていたが、その呼吸は荒く、苦しげに咳き込んでいた。

「不意打ちされちまったみたいだな」と、ヒーローは思いきつて話しかけた。

男が呻くように答える前に、少しの間があつた。

「ああ、そうだ。忌々しい怪物どもめ！ 襲いかかられるまで全く気づかなかつたんだ。連中は、獲物を追いかけている時には、あのしゅうしゅうという音を決して立てないのさ——音を出すのは、相手を追い詰めた時だけなんだ！」

「俺も知らなかつたよ」と、ヒーローは答えた。「連中に出くわしたのはこれが初めてだ——運が良かったんだな、俺は！」

そう言いながら、彼は毛皮つきのブーツを履いた脚で切断された頭部に触れ、星明かりが複眼構造になつている目に落ちるところまで回転させた。すると、死んでいるはずのその目が彼をじつと見つめているような気がして、顔を歪めた。まさにその時、首なしの死骸のひとつがピクピクと動いたかと思うと、硬い甲殻が岩の上でガタガタと音を立てた。二人は死体から一歩離れて体を震わせた——その寒気は、夜の空気の冷たさだけに由来するものではなかつた。

二人はようやく互いに向き直ると、幻夢境の流儀に則つて互いに手を握りあつた。

「時々、寄宿している村では、エルディンと呼ばれている」

黒い上着を羽織つた男は、ヒーローにそう伝えた。

「エルディンというのは《放浪者》を意味する古い言葉でな。俺にはおあつらえむきだ。もちろん、覚醒めの世界では別の名前がある……少なくとも、そうだと思う。お前さんの名は？」

「俺の名は、ヒーロー、デイヴィッド・ヒーローだ。夢の名前はドリーム・ニームはまだないんだがね、有名所の土地については、それなりに旅慣れているつもりだ」

「夢の名前がないのか、デイヴィッド？ フムン」

エルディンは歯を見せてニヤリと笑うと、いわくありげな表情を浮かべて頷いた。

「なるほど、覚醒めの世界からやって来た旅行者のお仲間というわけだ。最近はとんと見かけなくなっちゃったが。それで、どうしてまたこんなところにやって来たんだ？」

「こっちこそ、話したいのはやまやまなんだがね」と、ヒーローは神経質な様子で返事をした。

「こういう巫山戯た場所ふざけで、おしゃべりに明け暮りたい気分には到底ならないな。夜を気楽に過ごせる場所がないのかい？」

「この忌々しい怪物どもに襲われた時、俺はあそこの影に隠れた洞窟に向かっていたのさ」と、エルディン。「ポケットには火打ち石が入っていて、荷の中には材料が揃っている。焚き火のための、乾いた木切れくらい見つかるだろうさ。お茶でも一杯どうだ？」

ニヤリと笑うエルディンの歯に反射した光が、暗闇の中でヒーローの目に届いた。

「そいつは、親切なご招待だ」と、彼は答えた。「先行してくれよ、エルディン。でもって、歩きながら木切れを拾っていくことにしようや」

よく乾燥し、風雨の入り込まない洞窟の只中。平らな石に腰を下ろし、小さな銀製のコップに注がれた紅茶に口をつけると、エルディンは「それじゃあ」と口火を切った。

「幻夢境の街や都市から遠く離れた、こんな人跡未踏の土地でお前さんがいったい何をしていたのか、話してくれるってことだったな」

ヒーローは肩をすくめてみせた。

「俺はいつも、幻夢に連れて行かれるところに行くんだ。今回はここだったってわけさ」

「ということは、お前さんは常習的な夢見人ではないってことか？」

「そういうわけじゃないんだが、俺の見る夢にはいつもあまり意味がないっていうか——俺の言ってること、わかるかな。さっき言った通りなんだよ。俺は、幻夢に連れて行かれるままにどこにだつて行くんだ。幻夢境には、俺の要になる錨がないのさ——あんたと違ってな。宿を借りるような村も、家と呼べるような場所もないんだ。どんな種類のものであれ、永續性を構築するのに十分なくらい、ここに長くいたことがないんだよ。でもまあ、よくよく考えてみると、覚醒めの世界でも全く同じなんだろうな。あつちにいると、このことをあまりよく思い出せないし、こつちにいると……」

「他の場所のことをあまり思い出せない？」

「思い出せるのは名前だけさ」と、ヒーローは答えた。「それで、全部だ」

「俺の場合は」と、エルディンは言った。「いつも七百段の階段を降りて、『深き眠りの門』に

向かうようにしているんだ。そうすれば楽に、より長い時間をここで過ごせることに気づいたんだ。そう簡単に目が覚めないようにならな。あの階段を降りることで、夢の下の階層に降りることができるとわけた。お前さんにその気があれば、だが」

「俺向きじゃない」と、ヒーローは首を横に振った。「あの階段を使った連中が、二度と覚醒の世界に戻らなかつたって話を聞いたことがある。あそこは夢の中に逃避する奴が使うものであつて、俺にはそんなつもりはないんだ。ぶっちゃけ、俺は夢見つてやつが苦手だし——本当のところ、夢を見たいと思つてるわけでもないんだよ」

「お前さんの好きにするがいいさ」と、エルディンは唸るように言った。「ともあれ、俺たちは似た者同士なんだろうな。たぶん、俺たちは覚醒めの世界ではやりたいことが多すぎて——さもなくて少なすぎて——それで夢を見るんだよ。お前さんは、こちらに自分の錨がないと言うが、覚醒めの世界にもお前を繋ぎ止めるものはほとんどないだろうさ。賭けてもいいぜ。さらに言えば、俺はお前より年長だ。俺にとつて、夢は覚醒めの世界よりも優しいんだだろうな。とにかく、ここが好きなんだよ。何とはなしに、物事があつちより楽に思えるんだ」

彼は咳き込むと、大きな手を口に当てた。

「俺はこの夢の世界で、運を天に任せてみるつもりだ。幻夢に殺されなかつたとしても、この老いさらばえた煩わしい肉体がどの道、確実に俺を殺すことになるだろうからな！」

ヒーローは肩をすくめた。そして、揺らめく炎の中で相手の姿を眺めた。

電子立ち読み版 **幻夢の英雄**

2021年 6月 10日 立ち読み版 発行

著 者 ブライアン・ラムレイ
翻 訳 者 森 瀬 繚
発 行 者 青 木 治 道
発 売 株式会社 青 心 社

〒 550-0005 大阪市西区西本町 1-13-38

新 興 産 ビ ル 7 2 0

電 話 06-6543-2718

FAX 06-6543-2719

振 替 00930-7-21375

<http://www.seishinsha-online.co.jp/>

電子立ち読み版

無料

ドリームネーム
夢の名前を持たない剣士デイヴィッド・ヒーローと《放浪者》エルディン。

ひよんなことから相棒になった二人は、グレートブリーク・マウンテンズ ファースト・ワンス《大荒涼山脈》にある《原初のものたち》の巨岩の城塞で《冥き神》イブ＝ツトゥルを奉じる神官スィニスター・ウッドが持つという魔法の杖を盗むよう依頼される。だがそれは、狡猾に練り上げられた罠だった！

H・P・ラヴクラフトがクトゥルー神話で創造し、『タイタス・クロウ・サーガ』でラムレイ自身が描いた異世界《幻夢境》に転生した夢見人たちが繰り広げる剣と魔法の英雄冒険譚。ついに開幕！

青心社

書籍版は全国有名書店または
青心社ホームページから直販にて
お買い求めください

<https://www.seishinsha-online.co.jp>